

『中世日本紀・神道書籍』 展覧会開催に寄せて

國學院大學教授 岡田 莊 司

(二十一世紀COEプログラム事業推進担当者・神道資料館館長)

中世神道の発生源

神道は不変・不易の精神性を重視するが、一方では時代時代の変遷のなかに位置づけられる歴史的産物でもある。とくに、平安後期から中世に展開する神道は仏教を抜きにしては語れない。神道と仏教との関係は、本学COEプログラムの重要課題になっており、その時期に記録された神道書籍は未解明の部分が少なくない。今次の展覧会は、近年研究が高まりつつある「中世日本紀」に関する書籍と、伊勢神道周辺の両部神道に関わる典籍を中心に展示した。

中世に入ると神道書籍は急激に増加する。その書き手とされたのが伊勢神道の伊勢度会神主、両部神道の密教僧たちであった。中世神道の出発点は伊勢神道と両部神道とに求められるが、その成立の経緯については、必ずしも明確ではなかった。この空白部分を埋めることができたのが『中臣被訓解』と、その異本である『中臣被記解』の発見であった。

昭和五十年(一九七五)年七月、『吉田叢書』第四輯作成のため、西田長男博士に従って、天理図書館で吉田兼俱・兼右・清原宣賢らの中臣被注釈書を一ヶ月にわたり筆写しつづけた。その合間、吉田文庫の中から『中臣被記解』を見出した。それはこれまでの金沢文庫本や版本とは異なる内容をもっていた。その後、大学に帰り、図書館の中にも二本の『中臣被記解』の存在を知った。まさに「灯台下暗し」である。この國學院大學本が今回展示される(四)梵舜本と(五)黒川本である。